

## 若手研究者コラムリレー

### 鈴木 楓太 (すずき ふうた)

#### プロフィール

一橋大学 准教授  
日本体育・スポーツ・健康学会の専門領域: 体育史

名古屋生まれ・熊本育ち(39歳)  
一橋大学社会学部・社会学研究科で10年間を過ごす  
博士課程修了後は早稲田大学や京都先端科学大学等に在職  
2025年4月から現職

E-mail: suzuki.futa@r.hit-u.ac.jp



#### わたしの研究

##### 戦時時期を研究しながらスポーツとジェンダーの歴史について考える

広義の問題関心は、スポーツとジェンダーの歴史です。きっかけは人見絹枝研究でしたが、その後は主に日本の戦時時期にスポーツがどのように変容しながら存続したのかを研究してきました。戦時時期は女性を含む国民各層の身体のあり方に対して国家が露骨な介入・統制を行い、スポーツも大きな影響を受けました。しかし、先行研究では男子学生以外の状況がよく分からなかったからです。

戦時期の体育政策は、国民を兵力、労働力、「母性」といったジェンダー化した人的資源として動員する戦時人口政策と結びついて展開しました。その結果、スポーツは青年男性の鍛錬としては否定されますが、女子学徒の体育や労働者の厚生の運動としては奨励されました。男性性の領域として発展してきた競技スポーツが、兵士という究極の男性性に対する要請によって正当性を失った一方で、従来男性性を否定される傾向にあった卓球や排球等の種目がそれゆえに存続したわけです。この辺りの視点をもう少し深めると、男性・競技スポーツ・学校中心のスポーツ史像の相対化にもつながると思います。

それでは、スポーツに対する批判も物質的な制約も最も厳しかったこの時代、スポーツをする／みることを人々はこのように経験し、意味づけたのでしょうか。厳しい状況だからこそ、人間の「生」とスポーツの関係が象徴的に表れているかもしれません。というわけで、最近はその当時の日記の収集に精を出しています。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

必読

鈴木楓太. 戦時下の国民生活と体育・スポーツ. 戦時下の大衆文化—統制・拡張・東アジア—. KADOKAWA, 2022, pp.239-268.  
鈴木楓太. 女性アスリートの身体表象に関する史的考察—人見絹枝のうつぶせエピソードを中心に—. 体育学研究 65: 253-272, 2020

#### (なんでも帳)

昨年6月に子どもが生まれて、今年の3月まで育休を取得していました。親二人でなんとかやっていますが、初めの頃は「これでいいの？」の連続で、不安になることばかり。そんなときに支えになったのが、「たまひよ」アプリの「ルーム」でした。同じ月齢の赤ちゃんを育てる親(ほぼ母親)たちが、わが子の様子や子育ての悩みなどを書き込み、励ましあったり共感しあったりできるコミュニティです。

この「ルーム」で、新生児期の頃に最も多くの共感を呼んだ話題の一つが、「男って体力なさすぎない？」でした。夜勤(夜通し子どもを世話すること)もしないのに「疲れた」が口癖なの何でだろう、毎日ジムで鍛えているのに寝かしつけの抱っこを秒でギブアップするの何でだろう、すぐに体調崩すの何でだろう、何でだ何でだろう…。

スポーツの世界とは異なるこの体力言説は、子育て空間では「常識」となりながら社会全体としてみれば周縁化・不可視化されているように思います。パワーとスピードを競う近代スポーツは男性優位の体力観・身体観を再生産してきたとされていますが、多様な体力概念や体力観が併存するなかで特定の体力観が主流化されるプロセスを丁寧に分析する必要があります。例えば、以前論文を書いた戦時期の女子体力章検定は、女性基準の体力観を標榜しながら結局は女性を二流と位置付ける体力観に帰結したようなのですが、このあたりはもう少し掘り甲斐があるかもしれません。

でもその前に、子どもの就寝後に机に向かってパフォーマンスを発揮する「体力」をつけなければ。経験者の方はアドバイスをください。

#### 日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育・スポーツ・健康学会若手の会が発足しました！→ メーリングリスト登録フォーム:

<https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

[taikugakkaiwakate@gmail.com](mailto:taikugakkaiwakate@gmail.com)

